

白山ふるさと文学賞

第十三回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生 小説の部 優秀賞

「」（かつこ）」

美川中学校三年

坂尾^{さかお}

玲奈^{れな}

連なるビルから光の粒がもれ出し、星のように細やかな輝きを放つ夜景を、私は何時からか素直に綺麗だと思えなくなった。十七歳冬。夜景を創り出す光の粒は、夜遅くまで残業をする大人の微かな明かりに過ぎない。陽が街を照らす時間に居場所を持ち難い大人が、動き始めた証拠に過ぎない。何もロマンチックなものでなく、所詮そんな大人が生み出した虚像なのだ。そんな考え方を持ち合わせる私は、過去の自分から何を失い何を得たが故のものなのか自体、不確かだ。

高校に入学し今に至るまで、永山令子は自分を魅せることだけを考え続け生きてきた。両親と犬と暮らすマンションの九階から見える夜景は、今日もどこか混沌としている。日没時間が早いから見える世界が暗いのも、肌寒いのも、心寂しいのも、すべて季節のせいにする。現実逃避にSNSを開く。SNSは常に自分の価値を教えてくれた。両親は私が小さい頃から共働きだったため、親からの愛情を感じたことがなかった。一応、そのお陰で周りの人達よりは少し格式高いこのマンションを借りられているし、お小遣いも多い。だから寂しくない。今晚も両親がいないため、自分で料理を作った。前日から仕込んでおいたチキンステーキ。写真を撮り、SNSに投稿。投稿についた称賛のコメントを見て、満足して眠るのが私の習慣となっている。ついでに自撮りもあげる。誰かが「可愛い」と褒める、幸せを感じる。私はSNSにつく通知の数が増える毎に幸せを覚え、それが癖になっていく。逆にそういった数値などで視覚化されたものでないと、幸せが分からない人間であった。そういう人間だった。

今晚も令子は手料理を作った。今日は海外産のスパイスを使用したペペロンチーノ。徐々に湯気が立ち、パスタがふやけてきた頃に違和感がした。隣の部屋の方向から、鼻がツンとするような刺激臭がするのだ。臭いは強まっていく。私は耐え切れず、隣の部屋に注意しに向かった。

「すみません、お宅から異臭がするのですが、」

少し間が空き、扉の先から足音が響く。

「申し訳ありません！インクを大量にこぼしてしまったもので」

最近引越してきたこの隣人はどうやら、芸術家らしい。時折、同じような部類の芸術系の人達が出入りするこの号室を私は不思議に思っていた。出てきた女性はやはり個性的な外見をしていた。ウェーブがかかった髪。見たことない柄のシャツワンピース。大量に腕に巻かれたブレスレット。普通の人生を送ってきたら、きっと関わることのなさそうな奇妙な風貌である。

「あの、良ければ片付け手伝っていただけませんか？」

「別に良いですけど…」

この言葉を交わした数時間後、なぜかこの一昔前の邦画に出てきそうな見た目の芸術家と、ペペロンチーノを食べることになった。彼女は福島麻希と名乗った。私と年齢は三つしか違わなかった。現代アートを描いている。

「美味しい。全部令子さんが作ったの、すごいわね。食べないの？」
「私は写真撮ってから食べます」

SNS用の写真を連写し、フィルターをかけ加工を施す。時間をかけて、既にペペロンチーノは冷めきっていた。

「SNSでもやってるの？」

「そうなんです、料理とか載せてて」

「まあ確かに令子さん美人だものね」

意外と社交的でこういったフォローも交えてくれる方だった。思想全開そうな外見からは想像外の人柄だと私は思った。

「そうだ、令子さん。私の絵のモデルになってみない？」

「私が？」

「貴方が。座っているだけでいいのよ」

何かが起る気がする。それがいいものなのか悪いもののかは定かではない。でも、この人は普通じゃない。影響力がありそう。

「私で、良ければ」

この日の晩は異臭騒ぎから始まり、芸術家の顔も持つ隣人の家でペペロンチーノを共に食らい、作品のモデルになることを約束するという結末で終わった。

あれから私は何度も麻希さんの家に通った。ひたすら椅子に座った自分をスケッチされた。麻希さんの描く線は一本一本が生き生きして見えた。この時間を過ごす中で、私達は多くの会話が生まれた。回数を重ねる度、彼女が纏うベールがはがれていく感触があった。

「そういえば、この間ここにある絵を投稿したらすごい反響があったんですよ！」

「本当？それはよかったね」

麻希さんはSNSでの発信活動をしていない。作風が現代戯画だから、万人受けしない。わかりきっているようでわかっていない考察等を目にしたくないからやらない。と本人が明言しているのを聞いた。

「そんなに興味ないですか？私、麻希さんの作品をSNSで発信したらきつと注目を集められると思うんですが」

「はつきり言ってしまうなら、興味はないし今後もやらないと思う。ある程度の評価は得られても、その分批判もあるじゃない。私が思っていたのと違う解釈をされたら、私の作品は時に誰かの凶器になる。それを踏まえて私は活動しているのよ」

芯があり、揺らぐことのない性格が私とは反対で悲しくなった。分かり合えそうで分かり合えない関係なのだろうなと思った。

あれから音沙汰ないまま一か月が経過した。私はエントランスでもフロアでも麻希の姿を目にすることはなかった。きつと作品と向き合い、制作に没頭しているのだろう。私は自分からは何も行動を起こさずに待ち続けた。SNSに夢中になって、毎日自分に届くDMやコメントを読みふける規則の悪い生活をしていた。そんな中ある日、麻希さんが、「絵が完成した」という連絡が入った。すぐに私は嬉々して

して家にお邪魔した。

「完成品です」

麻希さんが指していた先には、スマホを持った私の絵があった。なにも脚色されていない、ただスマホを片手に座る不格好な私が切り取られた絵。よく見ると、スマホは私の手によって握られているのではなく、手首あたりからスマホと一体になっている。

は？何これ。不細工な私。コンプレックスが誇張されている気がする。ありえない。こんなの私じゃない。こんなに私は滑稽じゃない。こんなに私は醜くない。

「最近スランプから抜け出せずに悩んでたのだけど、令子さんからもらった刺激のお陰で素晴らしい作品ができたわ。ありがとう」

「これのどこが素晴らしいの？」

私は声を震わせ、麻希さんの言葉を遮るようにして吐き捨てた。

「こんなの私じゃないよ、私じゃない」

「本当に、そう言い切れる？」

作品を貶されたからのか、麻希さんは珍しく怒っている。私の目を見る。体が瞳に吸い込まれそうになる。

「手料理とか繕った優雅な生活載せて承認欲求を満たしているのも貴方、アンチ見つけて自分はこの人達よりかはマシだと安堵するのも貴方、いいね数が減って血眼になって焦るのも全部貴方なのよ永山令子」

私はそんな人間じゃない、私は――。

「貴方の魅力は、あんなおしゃれに特化した手料理でもない。この高層マンションに住んでいることでもない。あの高貴な愛犬でもないの。貴方はそれ以上のものを持つ。私は、それに気付いてほしかった。貴方がそれ程繕ってまでつけたカッコって何？」

カッコ、格好、かつこ、「……？私の「」の中身は空だ。何もない。私、両親が働き者で。一人で育ってきて。だからあんなに料理がで

きるようになって、お金にも余裕があつて。SNSにその幸せを作つてアピールしていました」

本当の幸せつて、私が「」に欲しいものは。

「でもこんなの幸せじゃない。一番じゃない。投稿してる自撮りも、加工にまみれてて本当の素顔じゃない」

この不格好な自画像で気付いた。麻希さんの、たった一枚の絵で分かった。

「本当の私は、加工もフィルターも施さない、麻希さんから見える私なんだと思います」

「令子さんは、今一番何を求めている？」

「周りからの愛情」

愛情を向けられたら、加工に頼らなくても、幸せな部分だけを切り取らなくても。

「私、愛されているという確証が欲しい」

こんなこと麻希さんに言つても、という諦めの気持ちが脳内で顔を出した時。麻希さんは突然私を抱いた。

「私が貴方を愛してる」

「麻希、さん……？」

「いつでもこの部屋に来て、自分がわからなくなったら。この場所にある絵が、貴方に何かを与えてくれるはず」

貴方が私を抱きしめて包んでくれた時、私は初めて人間が持つ本来の暖かさを知りました。両親からももらえる境遇にない自分を悔やむ気持ちもあります。でも、無数のコメントにも、いいねにも敵わない、不安定な私の体を支えられるような感覚を覚えました。麻希さんの胸に、耳を寄せるとかすかに心臓の音がした。不思議な人すぎて、今まで麻希さんが今を生きる人間であるのかどうかも不確かな気がしていたから、はつきりとした鼓動が聞けて安心した。

後日、改めて麻希さんの家に行った。見せたいものがあると、お誘

いがあつたのだ。私はSNSを辞め、大学受験に向けて学業に励んでいる。そんな中の麻希さんとの時間は、息抜きとして最適だった。麻希さんの見た目は、あの日と何も変わらない。今日も見えたことのない柄の服。

「令子さんいらつしゃい。これ見て」

麻希さんが指していた先には、また別の私がモデルとなつた作品が置かれていた。でも、今度は絵の中の私は醜くない。愛嬌のある笑顔で、こちらを見て笑っている。現実の私は、麻希さんにこんな笑顔を見せたことないはずなのだけど、

「これ私？すごく素敵」

「でしょ？これ、貴方に贈るわ」

「ありがとうございます……嬉しい」

私はこの絵の中の私のようになりたいと思った。絵の中の私は、この作品を描いた麻希さんは、馬鹿な私に模範を示してくれた。私は頑張ります。麻希さんの部屋に差し込んだ光は、絵の中の私へのスポットライトのように完璧な位置を照らしていた。